スポーツマネジメント

第1回　明治安田生命Jリーグ2015開幕！ チームを勝利に導く、「言葉の魔法」とは？

明治安田生命Ｊリーグ2015が始まった。

2015シーズンは、2004シーズン以来11年振りに２ステージ制によるリーグ戦が導入され、上位チームによるチャンピオンシップ（仮称）により優勝が争われることになった。このため、戦術やテクニックだけではなくフィジカルやメンタル面でも優れたチームが勝ち残る可能性があり、白熱した優勝争いが展開されそうだ。

メンタルを高める「言葉の魔法」

サッカーに限らず他のスポーツやビジネスの場でも、チームが勝ち続けていたらリーダーはおごらず、冷静にさせる必要があり、連敗が続くようならば、逆に奮い立たせなければならない。

チームが逆境に立っている時、優れたリーダーは「言葉の魔法」を使う。

その時々で言葉自体は異なるが、どんな場合も感情に訴えなければ効果がない。なぜなら、人間は感情によって動かされるが、他者からの命令で動くものではないからだ。例えば、「自信を持て！」と言われても、自信は、言われて持てるものではない。「自分たちのサッカーをしろ！」と言われても、チームが浮き足立っているときには効果を発揮しないからだ。

リーダーが選手の心を揺さぶって、状況を一変させたサッカー史に残る言葉を紹介しよう。

①「ベスト４で帰るのか？銅メダルを持って帰って歴史をつくるのか？さあみんな、世界を驚かせようではないか！」
（1968年、デッドマール・クラマー元日本代表コーチが、メキシコオリンピックの準決勝で日本がハンガリーに５―０で完敗し、意気消沈していた日本代表チームに対して）

②「今、君たちはヨーロッパのカップの間近にいる。このまま負ければ触れることもできないじゃないか！さあ行け！それを手に入れずに戻ってくるな！」
（1999年、マンチェスター・ユナイテッドのアレックス・ファーガソン元監督が、ＵＥＦＡチャンピオンズリーグ決勝で、バイエルン・ミュンヘンにリードされたハーフタイムで）

これらの言葉なしには、それぞれのチームが「銅メダル」を獲り、「チャンピオン」となることはなかったと思われる。

「言葉の魔法」のもう一つの効果

もう一つ、「言葉の魔法」には行動を起こさせる効果がある。ガンバ大阪はＪ２からＪ１へ昇格した2014シーズンの前半で３連敗があり、しばらく降格圏内の16位あたりで低迷したことがある。

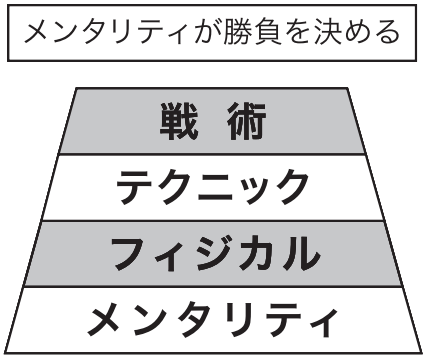
この間、ガンバ大阪の長谷川健太監督は、どんと構えて動じず、行動させる「言葉の魔法」をかけ続けた。

人間の行動と感情はお互いに作用する。長谷川監督は選手たちを行動させて感情を起こさせた。「球際で負けるな！」、「奪ったら速く攻めろ！」、「もっとピリッと走らんか！」…。

選手たちは、苦しい中でも監督の言葉を行動に移すことで闘志が湧き、次の試合への原動力となっていった。

2015シーズンのガンバ大阪の試合から

2014シーズンに３冠を達成したガンバ大阪と５位に終わったサガン鳥栖が戦った2015シーズンの第２節（2015年３月14日）では、右の図に示す４つの「勝負を決める要因」のうち、上の３つは両チームとも2014シーズンとほとんど変わらない中、勝敗を分けたのはメンタリティだった。



ガンバ大阪は、１週間前の開幕戦で勝ちを逃がし、この試合でもチームの切り札であるＦＷのパトリックが、試合開始早々、決定的なチャンスを外した。その後も、何度かゴールチャンスがあったものの決定力を欠いていた。

チーム全体も、圧倒的なボール保有率を誇ったガンバ大阪に対し、サガン鳥栖の「相手に持たせてやってこぼれ球を拾い、勇気をもって鋭く切り込む」という戦術が当たった。すでに初戦を白星でスタートし、この日も先制点を挙げたサガン鳥栖が、一枚上の精神的な余裕を感じさせた。逆に、ガンバ大阪はボールを持ち続けながらも全体に弱気な攻めで、中央から攻め込む果敢さが欠けていた。

結果として、１―０でサガン鳥栖が勝ち、ガンバ大阪は敗れた。まだ2015シーズンが始まったばかりだが、先行きが危ぶまれる試合であっただけに、今年もどんな長谷川監督の行動させる「言葉の魔法」が出てくるか楽しみだ。

（大西 宏）